

国語表現		date : 年 月 日		自然学園高等学校 梁川キャンパス	
学習内容：変遷をたどる		学籍番号			
和歌「万葉・古今・新古今」		氏名			

三大和歌集の比較

表現上の特徴 概念特色(歌風)・歌の心(精神)	技法	調子	作者	収められている 歌の種類(形式)	歌数	編者(選者)	成立時代 成立の背景	
<ul style="list-style-type: none"> 素朴 力強い 【ますらをぶり】 「まこと」 	<ul style="list-style-type: none"> 枕詞・序詞が多い 反復・対句が多い 	二句切れ、四句切れが多い	天皇から農民、兵士にいたるまで、幅広い階層 〔東歌・防人の歌〕含む	<ul style="list-style-type: none"> 短歌 五七五七 長歌(約60道)五五...五七 旋頭歌(約60道)五七五七 仏足石歌(1道)五七五七 	二十巻 約四千五百首	<ul style="list-style-type: none"> 不明 大伴家持と言われている 	<ul style="list-style-type: none"> 〔八世紀後半〕時代末 ※現存する日本最古の歌集 	万葉集
<ul style="list-style-type: none"> 繊細 優美 【たをやめぶり】 「もののあはれ」 	<ul style="list-style-type: none"> 序詞・掛詞・縁語・擬人法が多い 枕詞 	三句切れが多い	<ul style="list-style-type: none"> 六歌仙、平安歌人、読み人知らず 大伴家持、小野小町、僧正遍昭、大伴兼光、文屋康秀、嘉摩師 	<ul style="list-style-type: none"> ほとんど短歌 (長歌5首、旋頭歌4首) 	二十巻 約千首	<ul style="list-style-type: none"> 凡河内躬恒、紀友則、壬生忠岑たち 	<ul style="list-style-type: none"> 〔十世紀初め〕時代初期 醍醐天皇の勅命によって編集されたわが国最初の勅撰和歌集 	古今和歌集
<ul style="list-style-type: none"> 絵画的 幻想的 【幽玄】「有心」 	<ul style="list-style-type: none"> 掛詞・たとえ・本歌取り 体言止めが多い 	初句切れ、三句切れが多い	おもに 当代(平安末)鎌倉初期歌人	すべて短歌	二十巻 約千九百八十首	<ul style="list-style-type: none"> 藤原家隆たち 	<ul style="list-style-type: none"> 〔十三世紀初め〕時代初め 後鳥羽上皇の命によって編集された八番目の勅撰和歌集 	新古今和歌集

▽万葉集

春過ぎて 夏来るらし 白たへの 衣干したり 天の香具山
持統天皇

新しき年の始めの初春の 今日降る雪の いや重け吉事
大伴家持

多摩川にさらす手作りさらさらになに 何ぞこの児のここと愛しき
東歌

父母が 頭かき撫で 幸くあれていひし言葉 忘れかねつる
防人歌

見たまま、感じたまま、屈曲のない素直で素朴な直線的な歌風。男性的「ますらをぶり」

国語表現

date: 年 月 日 自然学園高等学校 梁川キャンパス

学習内容: 変遷をたどる

学籍番号

和歌「万葉・古今・新古今」

氏名

▽古今和歌集

人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香かにほひける
紀貫之

世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし
在原業平

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる
藤原敏行

思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを
小野小町

▽新古今和歌集

道の辺に清水流るる柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれ
西行法師

玉の緒をよ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする
式子内親王

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ
藤原定家

駒とめて袖うちはらふ陰もなし佐野のわたりの雪の夕暮れ
藤原定家

本歌 苦しくも降り来る雨か三輪の崎狭野さのの渡わたりに家もあらなくに

【万葉集】

国語表現

date: 年 月 日 自然学園高等学校 梁川キャンパス

学習内容: 和歌の表現技法

学籍番号

和歌 資料

氏名

【句切れ】 〓 意味や調子の切れ目。

初句切れ 二句切れ 三句切れ 四句切れ
 五 七 五 七 七

①五七調…二句切れ、四句切れの短歌の持つ調子
 『万葉集』に多く、雄大で男性的なりズム。

②七五調…初句切れ、三句切れの短歌の持つ調子
 『古今和歌集』『新古今和歌集』に多く、
 優雅でなだらかななりズム。

※短歌の中には「句切れなし」の歌もある

【和歌で用いられる表現技法】

●枕詞 ー ある特定の語を導き出すために前に置く五音の語
 (多くの場合枕詞そのものは意味を持たない)

枕詞 ー あをによしならのみやこは咲く花のにはふがごとく今盛りなり

枕詞	係る言葉	枕詞	係る言葉	枕詞	係る言葉
あかねさす	紫・日・照る	からころも	着る・袖・裾	ぬばたまの	黒・夜・闇
あしひきの	山・峰	くさまくら	旅・露	ひさかたの	光・天・空
あらたまの	年・春・月	しきしまの	大和	みづどりの	立つ・うき
あをによし	奈良	しろたへの	衣・袖・袂・雪	むらぎもの	心
いはばしる	垂水・滝	たらちねの	母・親	もののふの	八十(やそ)
うつせみの	命・世・身	ちはやぶる	神	やくもたつ	出雲

●序詞 ー ある語句を導き出すために置く語で、枕詞と違って音数は不定で、かなり長いものもある。

序詞 ー あしひきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む

●掛詞 ー ひとつの言葉に二重の意味を兼ねさせ、上下の句にかけて用いる技法。(同音異義語を利用した方法)

花の色は移りにけりないたづらに我身世にふるながめせしまに

「眺めているうちに」(時間が経る)

「長雨が降り続いてるうちに」(長雨が降る)

・ふる……「経る」「降る」とを掛けている

・ながめ…「眺め」「長雨」とを掛けている

●縁語 ー ある語と意味上の関係のある語(縁のある語)を使って調子を整え、連想をからませて、表現効果を高める技法。

すずか山 浮世をよそにふりすてていかになりゆく我身なるらん

「すず(鈴)」「の縁語として」「振り」「鳴り」

●本歌取り ー 有名な古い和歌の一部をよみ込んで、二重写しにし、いつそう複雑な心情をかもしたして感動を深める技法。

《本歌》 ー ひさかたの天の香具山このゆふべ霞たなびく春立つらしも

《本歌取りの歌》 ー ほのぼのと春こそ空に来にけらし天の香具山霞たなびく

(『新古今和歌集 後鳥羽上皇』)

●体言止め ー 終わりを体言(名詞)で止め、言い切らないことで、深い余情を残す技法。

さびしさにたへたる人のまたもあれな庵ならべん冬の山里

※この他に「比ゆ(たとえ)」「擬人法」、「対句」など。